

農村舞台の復活と 地域の活性化

佐藤憲治

農村舞台を有する地域に生まれ育った方たちにとって、舞台の存在は、あまりにも身近すぎて、その価値や可能性について日常取り立てて考える機会は、そうないのではないだろうか。

大学の研究者が村を訪れて舞台の調査や説明会を行ったり、中央で活躍する芸術家が舞台に関心を示してくれたり、あるいはマスコミの取材が入ったりするのは、先人たちが大切に守り続けてきた舞台の価値について、改めて考える大きなきっかけになるものと思う。

最近、地域外の人の視点を借りながら、自分たちの住む地域の風土に根ざした生活様式や文化を見つめ直し地元の良いを再認識しようとする「地元学」という取り組みが各地で行われている。水俣病という悲劇が起こった事実と向き合い、新たな地域づくりに取り組む水俣市役所の吉本哲郎さんが提唱し、全国に広まったものである。

農村舞台の保存・活用に当たっても、地域外の人の視点を活用する「地元学」の手法や考え方は非常に有効なものではないだろうか。最近の事例として、平成十三年に復活公演を行った神山町小野さくら野舞台には東京芸術大学の教授や学生が調査に入っている。また、平成十四年に復活公演を行った勝浦町今山農村舞台では、東京理科大学講師で、現在、農

村舞台の会の副会長を務める川上光洋氏が調査を行い、全国的にもめずらしい仮設式舟底舞台の仕組みを発見したことが大きな契機となって、地元保存会が結成されたのである。

このような事例を踏まえ、阿波農村舞台の会としては、農村舞台を有する地域の住民の方たちにとって、「地域外の視点」としての役割を担うことができるのではないだろうか。会の行う調査や公演などの活動が、農村舞台の価値や可能性について改めて考えるきっかけとなり、舞台機構の復元やふすまカラクリ等の調査、出演者の交渉や広報など復活公演に向けた諸準備を、地域の実情に応じてお手伝いしながら、ともに楽しませていただく、そうした活動を続けていくことができれば一定の役割を果たせるものと思う。

昨年十月、三好町教育委員会の協力をいただき、阿波農村舞台の会との共催により八十年ぶりの復活公演を実現した三好町の法市農村舞台では、公演を契機に「法市農村舞台保存会」が設立され、全戸が加入する運びとなった。今年も秋祭りに向けて、二度目の公演開催を計画しているところである。

公演の様子はNHKの全国放送で紹介されるなど、マスコミ各社に大きく取り上げていただいたことから、県内外で生活する家族や親戚をはじめ、地域外との交流も活発になったと聞いており、何よりの成果であったと考えている。

農村舞台は今後、地域の貴重な文化資源として、地域内外の人々の交流の場となり、地域の活性化を図る上で、大きな役割を果たすものであると確信している。

2003年秋・三好町法市農村舞台公演アラカルト

